

BCS Prize-winning Work

筑紫の丘斎場

Tsukushinooka Crematorium

所在地／兵庫県揖保郡太子町佐用岡732

建築主／揖南衛生施設一部事務組合

設計者／株式会社 遠藤秀平建築研究所

施工者／清水建設株式会社

竣工日／2003年3月20日

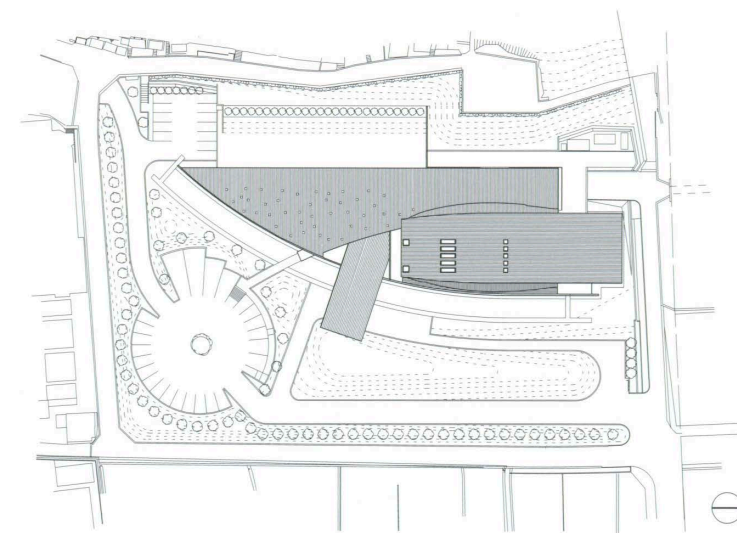
Location / Ibo-gun, Hyogo Prefecture

Owner / Inan eisei shisetsu ichibu jimu kumiai

Architect / Shuhei Endo Architect Institute

Contractor / Shimizu Corporation

Completion Date / March 20, 2003



配置 縮尺 1 / 2,000



前庭より棺搬入口を見る
Entrance for coffin view from the front court.



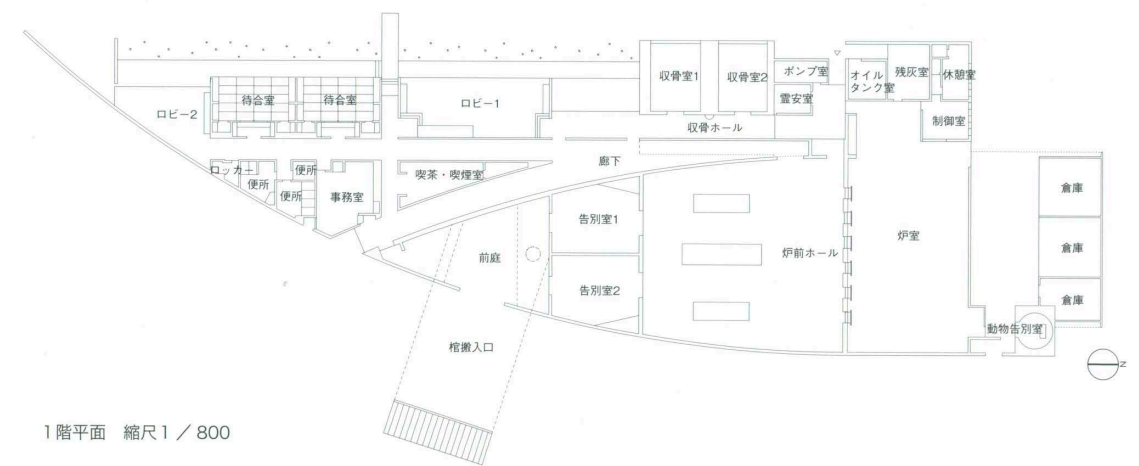
東側アプローチより見る View from the approach on the east.



右頁：炉前ホール Facing page: Hall in front of furnace.



廊下よりロビー 2 方向を見る View forward lobby2 from the passage .



告別室 Leave-taking room.



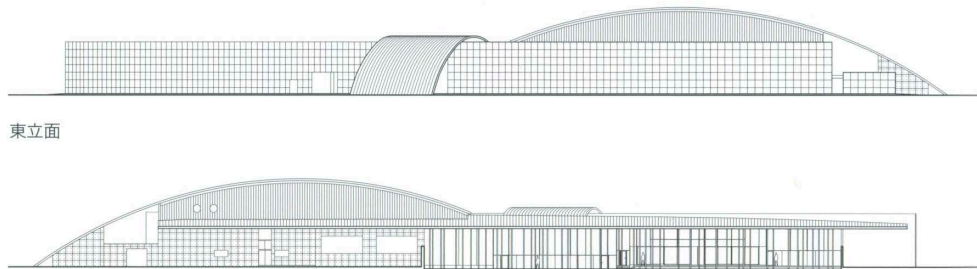
待合室 Waiting room.



ロビー 1 Lobby1.



西側から見る View from the west.



東立面

西立面 1 / 1,000

建築概要

敷地面積 12,658m²
 建築面積 2,771m²
 延床面積 2,315m²
 階数 地上1階
 構造 厚肉鉄筋トラスコンクリート構造+鉄骨造
 施工期間 2001年7月~2002年11月
 (外構工事2002年12月~2003年3月)

仕上げ概要

外部仕上げ
 屋根/溶融亜鉛メッキステンレス鋼板 t=0.5mm 立て
 ハゼ葺き コンクリートメタルラス型枠打放し(軒裏)
 外壁/花崗岩 1,000mm角 t=50~120mm 水磨・
 皮付・矢割肌 コンクリートリブラス型枠洗い打放し
 コンクリート打放し 溶融亜鉛メッキステンレス鋼板
 t=0.5mm角波張り 開口部/ステンレス製建具 外
 構/透水性アスファルト舗装(構内道路・駐車場) 植
 栽/芝(コウライ トールフェスク) シバザクラ モウソ
 ウチク ケヤキ ソヨゴ オリーブ等

内部仕上げ

[前庭] 床/切玉石埋込豆砂利洗い出し仕上げ 壁/

コンクリートリブラス型枠洗い打放し スギ板張りXD3
 回塗り 天井(キャノピー) コンクリートリブラス型枠
 打放し [告別室] 床/せっ器質タイル 壁/コンク
 リートリブラス型枠洗い打放し 磁器質タイル 天井/
 コンクリート打放しアクリル樹脂系塗装 [炉前ホール]
 床/アズール(大理石)貼り t=20mm 山西黒(花崗岩)
 貼り t=40mm 壁/コンクリートリブラス型枠洗い打
 放し 花崗岩水磨き t=20mm 乾式工法 天井/ヒ
 ノキ60×200mm 2段ルーバー XD2回拭取り
 PB+AEP [待合ロビー] 床/ライムストーン張り
 t=20mm 壁/磁器質タイル 天井/コンクリートメタ
 ルラス型枠打放し [待合室] 床/坊主タタミ(床暖房
 用) 壁/磁器質タイル 天井/ヒノキ20×200mm
 ルーバー XD2回拭取り
 [事務室] 床/コルクタイル 壁/PB+AEP 天井/
 シナベニヤ張り ウレタン艶消し塗装 [取書室] 床/
 ピアンコカラーラ貼り t=20mm 玄武岩張り t=40mm
 壁/ピアンコカラーラ貼り t=20mm 天井/コンク
 リート打放しアクリル樹脂系塗装 [霊安室] 床/玄武
 岩張り t=20mm 壁/コンクリート打放し 天井/
 PB+AEP [炉室] 床/エポキシ系防塵塗床塗装

壁・天井/グラスウールボード張り [制御室] 床/エ
 ポキシ系防塵塗床塗装 壁/コンクリート打放し 天
 井/PB+AEP [動物告別室] 床/玄武岩張り
 t=20mm 壁・天井/コンクリート打放し
設備概要
空調 方式/空冷パッケージエアコン方式 熱源/灯
 油(デンソーエース) 電気(東芝)
衛生 給水/直結給水方式 給湯/セントラル給湯
 方式+局所給湯方式(電気温水器) 排水/雨水・生
 活排水分流方式 床暖房設備 温水式床暖房
電気 受電方式/高圧受電方式 3φ3W6.6kVA 設
 備容量/575kVA 契約電力/179kVA 予備電源
 /ディーゼル発電機 210kVA
防災 消火/屋内消火栓(簡易操作性1号消火栓)
 移動式粉末消火器(第3種33kg) 排煙/自然排煙
その他 自動火災報知設備 非常放送設備 誘導灯
 設備 非常用照明設備 火葬炉設備 大型炉6基
 動物炉1基 バグフィルター 600m³/min 触媒式ダ
 イオキシ分解除去装置

BCS Prize-winning Work

渡辺真理 Makoto Watanabe
 大字根弘司 Hiroshi Ōune
 可児才介 Saisuke Kani

「クオリティ・オブ・ライフ(生命の尊厳)」の確立が提唱されてから
 久しい。それは主に医療の現場において人間が「もの」として取り扱
 われがちであることへの警鐘であったし、また建築がそういった精神
 的な分野において何をなすのかという問いかけでもあった。この
 斎場は兵庫県龍野市、揖保川町、御津町、太子町の4自治体が合
 同で建替えたものである。敷地とその周辺には古墳や墓地が多く存
 在しているというから古くから死者のための場所であったことは事実
 であるが、現在では施設近くまで宅地化の波が押し寄せている。

斎場は生者が死者に別れを告げる場である。死の一回性は人間
 にとっては圧倒的な重みをもつものなので、それを建築空間に表現
 することはたやすいことではない。じっさい、私たちは誰しも、ホテル
 ロビーよりも華美で、過剰な装飾に彩られた葬儀空間に辟易させら
 れた経験をもっていることだろう。そこは死を考えるための空間では
 なく、死を忘れるための空間となっている。死を穢れとみなし怖れる
 気持ちは人間誰しも否定し得ないものであるとしても、目前にある、
 親しい人の死を忘却させるようなしつらえに加担するような気分にな
 ることは、人間の「クオリティ・オブ・ライフ」を否定することにもつな
 がりかねないし、そこまで原則論にこだわらない立場の人間にして
 も、決して居心地のよいものではない。

この施設は会葬部門、待合部門、火葬部門に3分割される。そ
 のうち、来訪者が通過する会葬部門と待合部門において建築家は
 ラス型枠(金網製型枠)コンクリートというユニークな素材によるゆ
 るやかなアーチ状の壁、天井から構成された空間の中に、光と水
 という根源的な空間構成要素を適度に制御しながらあてはめるこ
 とで、「死者への尊厳」を感じさせる感銘深い空間を実現した。玄
 関脇の告別室やその先の炉前ホールは、室内に用いられた素材と
 光と水のコントロールとリリースのバランスが巧みになされていて、
 私たちが日常の生活では経験することの少ない、非日常性-永遠
 性といった空間体験を得ることができる。その結果として、死者と
 の別れが、単にセンチメンタルで悲しいだけのものではなく、生あ
 るものにとっては本質的で避けられない「出来事」であることを感じ
 させるものになっている。

この建物はまた、建築設計には卓抜な構造設計者が不可欠であ
 ることと、建築家と構造家のコラボレーションが建築に豊穡な成果
 をもたらしうることのひとつの証明にもなっている。設計行為におけ
 る協働を今後どのように顕彰、評価するかについては今年度の選考
 委員会でもひとしきり話題となったので備忘のため記しておく。

It has been ages since the idea of “quality of life” was first advocated.
 Warnings were voiced against the tendency, mainly in places offering
 medical care, to treat human beings as things. Architecture, it was argued,
 had to be more mindful of the human spirit. Four municipalities in
 Hyogo Prefecture—Tatsuno, Ibo, Mitsu, and Taishi—jointly built this
 funeral hall to replace old facilities. This area has long been associated with
 the dead; there are old burial mounds and graveyards in the vicinity of the
 site. However, housing developments are now encroaching on this area.

A funeral hall is a place where the living take leave of the dead. Its
 finality makes death a matter of overwhelming importance to humankind,
 but giving architectural expression to that significance is difficult. All of us
 have been disconcerted by funeral spaces more splendid and ornamented
 than hotel lobbies. Those are spaces for, not contemplating, but
 forgetting death. We may feel that death is somehow unclean and to be
 feared, but forgetting or ignoring the death of someone close to us, as such
 facilities would have us do, may ultimately lead to the rejection of the very
 idea of “quality of life” and leaves many of us uneasy.

This facility is divided into three parts: the funeral area, the waiting
 area and the cremation area. The architect has accommodated the funeral
 and waiting areas, which visitors pass through, in low-vaulted spaces with
 walls and ceilings formed of a unique material called “lath-form concrete”.
 Light and water, those basic spatial elements, have been introduced into
 the spaces in carefully controlled ways to create deeply moving spaces
 that suggest the solemnity of death. The architect maintains a skillful
 balance between the exercise of control and the provision of release with
 respect to materials, light and water in the funeral ceremony rooms and
 the crematorium hall. The spatial experience gives us a sense of the
 extraordinary and the eternal—states with which we are not familiar in our
 normal, everyday existence. As a result, we are made to realize that taking
 leave of the dead is not simply a sad, sentimental act but an essential and
 unavoidable event for all who live.

This building also demonstrates that an excellent structural designer
 is essential to architectural design and that close collaboration between an
 architect and a structural designer can yield extraordinary results. It should
 be added for the record that the question of how collaborators in design
 work are to be evaluated and recognized in the future was discussed in this
 year's jury.